ニュアンスの妙：日本では足りなかったものと帰国後のモスクワで足りなくなるだろうものの話

イリヤ・ザイツェフ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所／センター 2013 年度特任教授）

札幌芸術の森でカラスのブロンズ像と

私と妻が日本へ行く準備をしていた時、こんな注意を受けた。「気を付けてください、向こうでは足りないものが山ほどあると思いますよ！」その「山ほど」という言葉から黒パン、塩漬けの脂身、ボルシチ、ジャガイモを添えた塩漬けニシンなど東欧料理の選り抜きの品々に思い当った。それで私たちは黒パン、塩漬けの脂身、ビーツその他を持ち込んだ。新千歳空港の税関職員が丁寧に洗ったビーツで作ったボルシチは私たちの食生活の孤独感を和らげてくれた。ビーツはくっついていたモスクワ郊外の土くれを残らず落とすために洗われたのだ。私たちが最初に驚いたのはこの時だった。

同時期に滞在していたマナエフ氏（ベラルーシ）と

折に触れて私たちに足りなかったものといえば、それはやはり日本語である。例えば、私たちが醤油だと思って魚にかけて食べていた液体が、実は焼き肉のたれだった（実際その中にも醤油は入っていたけれど！）と滞在5ヵ月目に友人から聞いて初めて知った、とか。色つやのないムール貝に似た何か変てこな食べ物を買ったこともあった。ああ、あだこうだとしばらく話し合った結果、これはイカやタコか魚だろうということに落ち着いた。これはトマトで色付けしたコンニャクだと後で（専門家の検証を経て）分かった。一度レストランで（そこには英

語のメニューが無かった）自動翻訳を使って食事を注文したこともあった。ウェイターが日本語で質問を書き、パソコンが英語に訳し、私たちが英語で答えを書き、パソコンがもう一度訳した。まあまあの夕食になった。

札幌に暮らして早くも5ヵ月が過ぎた。日本国内を多少なりとも旅行してまず分かったのは札幌が一番良い場所ということだ。周囲の人びとの物腰や笑顔といった点からも、気候や生活の便の点からもそう言える。そして次に、今になって実感しているのは、自分の国では、モスクワでは色々なものが足りないと思うだろうということだ。以下に添えた一覧が完璧だと言うつもりは毛頭ない。むしろこれは誰でも日本にいれば馴染んでしまうもののうちのごくわずかであるが、ロシアにいれば忘れてしまうものでもある。何より興味を誘うものは、ロシアにもあるが少し違うものである。足りなくなるのは次のようなものだ：

1. 自転車。モスクワには自転車が無いわけではない。もちろんある。しかしそれに乗って仕事に行くのは一般的ではない。また少し命知らずでもある。

2. 研究室の窓の下にあるコートから聞こえるテニス部員たちの叫び声（とくに女子部員の！）。

3. 図書館。いつでもすぐ近くにある。モスクワに図書館が無いわけではない。もしかすると幾つかのモスクワの図書館のほうが蔵書は多いだろう。しかし札幌では欲しい本との距離はずっと近い。

4. カラス。一度は自転車（1. を参照のこと）のかごから弁当を盗られ、あっという間にイカ焼きを一切れ持ち去られてしまった（それも手から直接！何とか振り払った）けれど、親しみがわくようになった。モスクワにもカラスはいる。しかしこれほど生意気ではない。その役回りを果たしているのは野良猫や野良犬だ。札幌には野良猫や野良犬は全くいない。

5. 温泉。モスクワには浴場がないわけではない。もちろんある。しかし温泉は一つもない。

6. 児童公園。もちろんモスクワにもある。しかし札幌の方が大きいし、公園自体の種類もより多い。

7. いつでも手助けしてくれる人々。例えば、道を尋ねる時（例えば相手も行き方を知らないとしても）。

一言でいえば、我が家の生活が、札幌以前と以後に分かれてしまったということだ。どうなるか見ものだ。

（ロシア語から千葉信人訳）